

炎に託された祈り

——リアウ州バカル・トンカンを訪ねて——

吉 位 優 作 *

京都の夏の風物詩といえば、「五山の送り火」を思い浮かべる方が多いだろう。私の院生室がある京都大学総合研究2号館の4階から見ると、燃えさかる「大」の字は圧巻であり、京都に来て良かったと感じることのできる瞬間である。2024年、私は遠くインドネシアの地で、また別の「炎の行事」に出会うことになった。

バカル・トンカンの由来と意味

2024年6月、私はインドネシア共和国スマトラ島東海岸に位置するリアウ州に滞在していた。目的は、リアウ州ロカン・ヒリル県の県都バガンシアピアピで毎年開催される「バカル・トンカン (Bakar Tongkang)」と呼ばれる祭りに参加するためである。ジャカルタから国内線でリアウ州都プカンバルに飛び、そこから車で約5時間。舗装されていない道路に揺られながら、ようやくたどり着いたバガンシアピアピは、人口約8万人の港町だ。

バカル・トンカンは、全長約9メートルの木製の船の模型（トンカン）を燃やす宗教儀礼で、19世紀に中国の福建省から移住してきた中国系漁民たちによって始められた

とされる。福建省出身の移民たちは、長い航海を経てこの地にたどり着き、安住の地と定めたことを象徴的に示すために、それまで使用していた木製の船（トンカン）を焼却した。この行為は、「もう二度と故郷に帰らない」という永住の誓いであると同時に、航海の安全を導いた海の神への感謝と、祖先への供養を意味している [Nyoto *et al.* 2023]。

毎年旧暦の5月16日にあたる日を中心に、国内外から数万人の参拝者が集まり、町全体が祭り一色に染まる。祭りに用いられるトンカンは町の中心部にある最も大きな華人廟である永福宮 (Eng Hok Kong) に安置され、出発の時を待っていた。このトンカンは、地元の木工職人たちが数ヶ月かけて製作したもので、龍の頭部や色鮮やかな装飾が施されている (写真1)。

二つの前夜祭

夜になると、バガンシアピアピの町では二つの大規模な前夜祭イベントが同時開催された。ひとつは華人コミュニティを対象としたイベントで、台湾から人気歌手を招いたコンサートであった。会場は街の中心にあるホールに設けられる。多くの華人が詰めかけ、会

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 祭りで使用されるトンカン



写真2 街を練り歩くトンカン

場の外にまでプラスチック椅子が並び、立ち見の人々が大勢いた。もうひとつのイベントは、華人以外の住民を中心としたもので、華人向けの前夜祭会場から目と鼻の先にある野外ステージでジャカルタから人気バンドが招かれていた。しかし、この日はあいにくの雨で、屋根付きの華人向けイベントは大いに賑わった一方、野外のイベントは観客がまばらで、来賓席にも空席が目立っていた。私が野外イベントを見ていると「日本人か？ここに座れ」と言われて一番の特等席に座ることができたほど人は少なかった。

焼却の儀式一天に昇る願い

翌 22 日、いよいよバカール・トンカン当日を迎える。参拝者たちは手に赤く長い線香を持ち、顔の前に掲げながら静かに祈りを捧げる。「祖先が我々を見守ってくれますように」「家族の健康と商売繁盛を」といった願いが、立ちのぼる煙に託されていくようだ。午後 2 時、永福宮に色とりどりに輝くトンカンが姿を現した。その瞬間、「うおー！」

という歓声が沸き起こり、参拝者たちは一斉にスマートフォンやカメラを向ける。龍の頭部の精巧な彫刻、赤と金で彩色された船体、そして高くそびえる帆柱の美しさに、思わず息を呑む。行列が始まると、私もその列に加わったが、数万本の線香から立ちのぼる煙が顔の周囲に充満し、さらに非常に多くの人が密集していたため、途中で列を外れ、やや離れた場所から行列を見守ることにした（写真 2）。

行列は町の主要な通りをゆっくりと進み、約 30 分後にトンカンが焼かれる河岸の特別会場へと到着した。そこには前日から準備された数万枚もの紙銭が山のように積まれている。この紙銭は、あの世の祖先たちに送る「お金」を意味し、信者たちが 1 枚 1 枚に願いを込めて奉納したものである。午後 2 時、いよいよクライマックスの時間が近づく。リアウ州知事が壇上に立ちトンカンに近づく。会場は水を打ったように静まり返り、数万人の視線が一点に集中した。「3, 2, 1…」のカウントダウンの後、知事がトーチでトンカ



写真3 燃やされるトンカン

ンに点火する。瞬く間に炎が紙銭に燃え移り、巨大な炎の渦となって天へと昇っていく。オレンジ色の炎の中で金色の紙銭がひらひらと舞い上がり、その光景はまるで本当に祖先にお金が届いているかのような幻想的な美しさを呈していた（写真3）。

多様性と祭りへの参加

この3日間の祭り期間中、町内の大きな華人廟では訪れた人々に無料で食事が提供されていた。私が21日正午に訪れた時、食事会場には300人ほどが集まり、賑やかに昼食をとっていた（写真4）。会場には長いテーブルがいくつも並び、老若男女が肩を寄せ合って食事を楽しんでいる。華人廟職員の話によれば、これらの費用はすべて信者からの寄付によって賄われており、「宗教や民族にかかわらず誰でも食事をとることができる」とのことであった。実際、私のような外国人にも分け隔てなく食事が提供された。ただし、私の見た限りでは、イスラム教徒の方が食事をしている様子はなく、宗教的な配慮か



写真4 寺院での食事会場

ら控えているようであった。バカル・トンカン祭には、主に華人が中心となって参加しているが、町に住むムスリム住民もまったく無関係というわけではない。たとえば、祭り当日には、華人の参拝者たちがトンカンの周囲を取り囲む一方で、ムスリム住民の多くはトンカンの焼却場を隔てる水路の向こう側から、その様子を静かに見守っていた。宗教的な違いから儀礼の中心には加わらないものの、地域社会の一員として、祭りの盛り上がりや遠くから共有しているようにみえた。異なる信仰をもつ人々が互いを認め合いながら共存する、現代インドネシアの縮図がそこにはあった。

さらに、経済的な面からみれば、ムスリム住民にとってもこの祭りは極めて重要な機会となっている。祭り期間中、会場周辺には地元の住民による屋台が立ち並び、飲食物や土産物などが活発に売買されていた。宿泊施設も多くの来訪者で満室となり、普段は静かな町が一気に観光都市へと変貌する。私が話を聞いたベチャ（becak）と呼ばれる三輪バイ

クタクシーの運転手は、「ふだんは 1 日 5 万ルピア（約 500 円）稼げればよい方だが、バカル・トンカンの時期はその 10 倍以上、1 日 50 万ルピア以上稼ぐこともある」と笑顔で語ってくれた。信仰の有無にかかわらず、町全体に活気と潤いをもたらすこの行事は、宗教儀礼であると同時に地域経済のエンジンでもあるのだ。

バカル・トンカンのクライマックスは、燃え尽きたトンカンのマストがどちらの方向に倒れるかによって翌年の吉凶を占うというものである。この占いは数百年にわたって継承されてきた伝統で、地域住民にとって重要な指針となっている。マストが海側に倒れれば漁業が繁栄し、豊漁に恵まれるとされる。

一方、陸側に倒れれば農業や商業が栄え、町全体の経済発展が期待できると信じられている。炎が収まり、マストが倒れる瞬間まで、会場の誰もが固唾を呑んで見守る。2024 年は、炎上から約 30 分後、ゆっくりと陸側に倒れた。その瞬間、会場からは大きな歓声が沸き起こった。

引用文献

- Nyoto, N., I. Effendi, E. Evizariza and I. Effendi. 2023. Bakar Tongkang Festival in Bagansiapiapi, Indonesia—from Chinese Fisherman Ritual to Tourism and Economic Impact, *Review of Applied Socio-Economic Research* 26(2): 83–93.

「結婚」をめぐる私のフィールド体験

金 信 光 恵 *

「次の土曜日、結婚式をします。来られる？」
2024 年 12 月初旬のある日、WhatsApp の通知が鳴った。送り主はセネガル人の女友だちファティマ（仮名）である。えっ、結婚式？結婚の予定どころか、彼女に恋人がいたことすら初耳である。寝耳に水とはこのことだった。「おめでとう。行きます！」私は二つ返事で参列を表明した。セネガルの結婚式って

どんな感じなんだろう。式には誰が、どんな格好で来るのだろう。どんな料理が出てくるのだろう。想像が膨らむ。

しかし、今は木曜日の夜 7 時である。結婚式があるという「次の土曜日」とは明後日のことだ。どうしよう、時間がない。何を着ていけば、何を持っていけばいいの？というかそもそも、結婚式の招待が前々日に送られ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科